

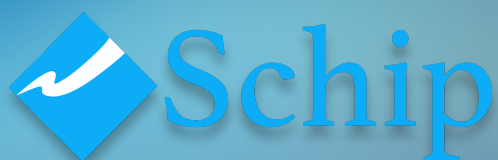
東大現代文完全解説

Anchor

虎の巻

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
現代文 虎の巻	7
虎の巻とは何か？	7
本文読解の虎の巻	8
(1) 二次元型の論説文	8
(2) 三次元型の論説文	9
(3) エッセイ	10
設問読解の虎の巻	11
虎の巻に基づいた採点法	13
現代文を学ぶことの意義	16
勉強と学問	16
大学を卒業してから	16
著作権表示	18

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければならないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければならないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

現代文 虎の巻

虎の巻とは何か？

虎の巻とは、東大現代文の各年度の問題に共通して通用する、抽象的で体系的な方法論である。

虎の巻の二本柱

当たり前の話だが、現代文の受験問題は本文と設問から構成される。本文がちゃんと読めていない人が設問に正しい解答をすることはできないし、また本文が読めていても、設問の意図や要求を理解しないままには正しい解答をすることはできない。よって、虎の巻もまた、＜本文読解の虎の巻＞と＜設問読解の虎の巻＞の二つに分かれるのが自然である。

虎の巻は道筋を示すもの

虎の巻を具体的で単発的な「解答テクニック」とは区別して欲しい。虎の巻は抽象的で体系的なものであり、読解の出発点からゴールまでの道筋を大まかに示した羅針盤のようなものである。よって、虎の巻を手にしながらか文章を素直に読んでいけば、決して間違った方向には進まないはずだ。

もしかしたら、「これを自動的に適用すれば良い」というような単純で機械的な便利道具ではないことに、あなたはがっかりするかもしれない。だが、そういう単純な「解答テクニック」は次の様な事態に陥りがちだ。「部分点はもらえても、設問の要求の中核を捕らえられていない」「それぞれの道具の適用の仕方はわかるけど、その道具をいつ使えばいいのかわからない」。だから私たちは、現代文の方法論は、読解の最初のステップから、最後のステップまでの道筋を示したものであるべきだと考えている。

虎の巻自体を疑うこと

「この教材の読み方」でも述べた通りだ。この教材自体を疑うことを忘れないで欲しい。必然的に、この虎の巻も、鵜呑みにせず疑って欲しい。私たちは虎の巻に自信を持っているが、どんなやり方が合うかは人それぞれであるし、またどんなや

り方も日々進化していくべきである。イチロー選手のバッティング理論を学ぶことは大きな意義があるだろうが、そっくりそのまま自分に当てはめてもうまくいくとは限らないし、また明日のイチロー選手はさらにアップデートされた理論を持っているに違いない。

では早速、虎の巻の具体的な中身について解説していく。まずは、本文読解の虎の巻についてだ。

本文読解の虎の巻

虎の巻では、現代文で出題されるあらゆる文章を三つのタイプに分類する。それは、「二次元型の論説文」「三次元型の論説文」「エッセイ」である。それぞれについて説明していく。試験会場でも、全体に目を通してながら、その年の問題文が3つの型のうちどれなのか（どれに近いのか）を意識して読み進めることが肝心である。というのも、もちろん問題文自体はどの型であるか読者に伝えることはないからである。

(1) 二次元型の論説文

二次元型とは、二項（時に三項）の比較や対比が論じられている文章のことを指す。いわゆる「二項対立」の文章もここに含まれる。このような文章の内容は、各項について、色々なテーマ毎に説明していくというものになる。よって、このタイプの文章は、二次元の表のような構造を持っていると言える。したがって、読解に際しても、表を使って整理することができる。横軸に比較されている項を、縦軸に各々の項についてのテーマごとの記述を取るイメージだ。以下はその例である（あくまで例である）。

	項1: 猫	項2: 犬
テーマ1: 大きさ	小さい	小さい
テーマ2: 鳴き声	ミャオ	ワン
テーマ3: 愛嬌の種類	小悪魔的	—
テーマ4: 飼育対象としての歴史	浅い	古い

時に、表で言えば空白が出てくる場合があるかもしれない。すなわち、「このテーマについては、この項について何にも述べられてない！」ということもあるかもしれない。そういう場合は、同じテーマの、別の項についての記述（つまり表で言えば横に隣接するセル）から類推するのが良い。上述の「猫」と「犬」の例では、「犬」の「愛嬌の種類」について記述が無い。その場合は、「小悪魔的と対比される愛嬌とはどんなものか？」という問いを立て、その答えを本文から探す必要があるということになる。

まとめると、二次元型の文章に対しては以下のような手順を踏むのがいいだろう。

1. どんな項が比較されているか見極める。
2. 各項についての記述を追っていき、それぞれの説明に共通のテーマがあることを確認する。これによって、最初の手順で見極めた項が正しいかを確認する。その上で、どんなテーマがあるのかを見極める。
3. 項とテーマごとに表で記述を整理する。
4. ある項について記述が足りない箇所は、同じテーマの、別の項目についての記述から類推する。

以上の手順で取り組んでみよう。東大の場合だと、第一問はこの型が多い。

(2) 三次元型の論説文

三次元型とは、問いと暫定解が何度も更新されていく文章だ。つまり、以下のサイクルが文章内で何度も繰り返されていくことになる。

1. 問い
2. 暫定解
3. 暫定解の否定

例えば以下のようなものだ。

1. 問い「言葉とは何だろうか？」
2. 暫定解「言葉とは他人に自分の考えや要求を伝えるツールである。」
3. 暫定解の否定「しかし、例えば、独り言や日記は他者を相手にしていないが、明らかに言葉である。他者の存在は言葉の必須要素ではない。」

4. 問い「改めて、言葉とは何か？他者を必要とする言葉と必要としない言葉の共通性は何か？」
5. 暫定解「言葉とは対話である。対話相手は他者だけでなく、自己も含む。」
6. 暫定解の否定「一方的な罵詈雑言も、無機質なコンピュータプログラムも、全て『対話』の一言で片付けられてしまうのか？また『宛先の無い手紙』は『対話』なのか？仮にそれが自分のために発せられた言葉だとしても、それは『自分との対話』と言い切れるのか。対話とは何だろうか？つまり、『言葉とは対話である』という単純な定義の問題点は、そもそも『対話』という言葉が曖昧であることだ。よってこの議論は乱暴な議論に終始するのが必然であると言わざるを得ない。」

これは単純化した例だが、実際の論説文にこの構造が埋め込まれていると、しばしばこの連鎖を見落としてしまうことがある。というのも、筆者が親切に「これはこの暫定解を受けて言っているんですよ」と教えてくれるわけじゃないし、むしろ、暫定解を述べた時とは違う言葉を使って暫定解を否定していることも良くある。

だから大切なのは、どこどこが同じ概念を指しているのかを丁寧に追うことと、次々と「正解」が変化することに驚かないことだ。落ち着いて流れを追って行けば攻略できる。心してかかろう。

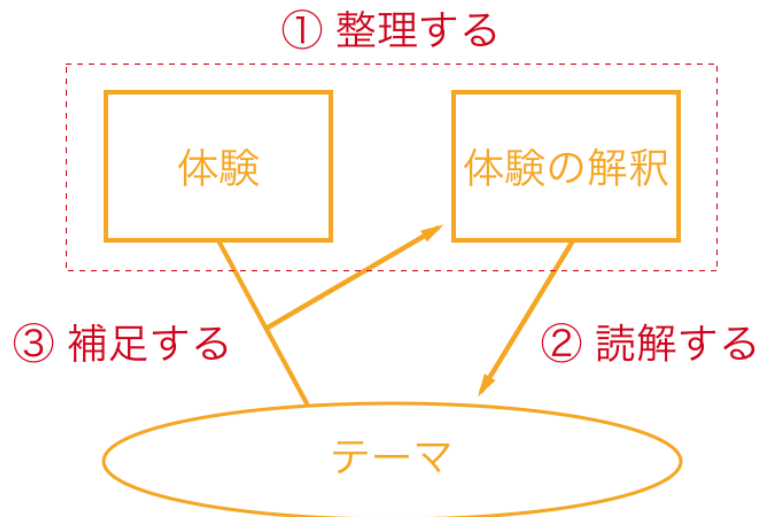
(3) エッセイ

随筆文も第4問を中心によく出題される。嗜むだけならそこまで気を張って読む必要は無いが、受験問題として解く場合には、筆者の持っている考えを丁寧に読み解いていかなければならない。

受験問題としてのエッセイの難しいところは二つある。一つは、読解の手がかりの量が少ない事だ。エッセイでは、筆者の体験や観察が紹介される部分が文章のかなりの割合を占めていて、それを通して筆者が何を感じたのか、何を言いたいのかがあまり書かれていない事がよくある。もう一つは、その筆者の感じたことについて書かれた部分も、読み取りにくいことが多いことだ。エッセイでは、あえて曖昧に書いたり、詩的な言い回しや比喻的・絵画的な表現を用いたりすることがよくある。

しかし、現代文の受験問題である限りは、どこかには必ず論理的に読み解くための手がかりがあるはずだ。そこで虎の巻では、次の方法でエッセイの内容を整理することをお勧めする。まず、本文を筆者の〈体験・観察〉と、その〈体験・観察〉に対する筆者の〈解釈〉の二つに分けて整理する。こうして整理すると、だいたい

＜体験・観察＞と＜解釈＞はセットになって述べられていることがわかる。次に、＜解釈＞から、筆者がどんな主張や思想を抱いているのかを類推する。これを＜テーマ＞と呼ぼう。その上で、今度は＜テーマ＞と＜体験＞を照らし合わせることで、再び＜体験＞を読んでみよう。こうすることで、さらに＜解釈＞がはっきり理解できるはずだ。こうしたサイクルを回すことで、エッセイ型の文章はどんどん輪郭がはっきりしていくのである。図にすると以下ようになる。



エッセイ型の文章に対峙した時は、仮に一読して意味が掴めなくても、このサイクルを丁寧に回すことで読解を試みていこう。急がば回れの心持ちが重要である。

設問読解の虎の巻

以下の三つのフェーズに分けて設問に取り組むことを推奨したい。

1. 構成フェーズ
2. 読解フェーズ
3. 表現フェーズ

これらのフェーズは、順番が大事だ。つまり、構成フェーズを飛ばして読解フェーズに移ると失敗するし、読解フェーズを飛ばして表現フェーズに移っても失敗する。また、稀ではあるが前のフェーズに立ち戻らなければならない場合がある。以上のことに注意しつつ、それぞれについて順に説明していく。なお、各年度毎の問題解説では、この三つのフェーズに沿った、解答のプロセスを「思考の目次」として詳細に紹介している。

構成フェーズ

「構成フェーズ」とは、設問の要求を確認し、読解に必要な観点や問いを見極めるフェーズである。当たり前の作業であるように思えるが、疎かにしてはいけない。文章は正しく読解できているのに、設問の要求を履き違えているために、正しい解答ができていない例は珍しくない。詳しくは各年度の問題解説に掲載されている他社解答例の批評を参考にしてほしい。

具体的には、以下のステップで取り組むと良いだろう。

- ▶ 設問文を確認する。
 - ▶ しっかりと読もう。まずはこの段階だけで素直に論理を立てることが重要だ。
 - ▶ 「～とはどういうことか？」 「～とあるのはなぜか？」 「～といえるのはなぜか？」 など、様々なパターンがあり得るが、徒らに類型化するのは良くない。あくまで言語に忠実に、なにを意味しているのか思考するのが肝心である。
- ▶ 傍線部を確認する。
 - ▶ 次に傍線部を読む。もちろん、傍線部を読むこと自体は当たり前ののだが、傍線部を読んでわかったことを、読解を進めるうちに見失ってしまうことがあるので要注意だ。
- ▶ 妥当な解答を導くために必要な問いを立てる。
 - ▶ ここまでを踏まえれば、以下どのような観点や問いの下で本文を深掘りしていけばいいかわかるだろう。次の読解フェーズでは、その観点や問いについて、本文を検討していけば良い。
 - ▶ 例えば、傍線部が真である論理的な理由を説明することが求められているなら、素直に「傍線部が真であるための必要十分条件とは何か？」と問いを立てれば良い。傍線部が比喻であるならば、「これは何の比喻か？」という問いを立てれば良い。指示語の内容が不明であるならば、「この指示語が指す対象は何か？」という問いを立てれば良い。
 - ▶ 問いを立てることはさほど難しくない。だが、この後の読解でその問いから脱線しないことが重要だ。

読解フェーズ

構成フェーズに続くのが読解フェーズである。読解フェーズでは、構成フェーズで立てた問いの答えを、本文の読解を通じて見極める段階である。先ほども述べた通り、構成フェーズを飛ばして安易に読解に移ってしまうと、むしろ回り道をしてしまうことになりがちだ。

解答すべき要素の少ない設問ならば、読解フェーズの終了時に解答は完成する。要素が多いと、読解フェーズ段階ではまだ答案は冗長すぎる状態になるだろう。しかしその場合は、次の表現フェーズで解答を簡潔にまとめる作業をするので、いずれの場合も読解フェーズ段階では短くまとめることは一切考えなくて良い。

表現フェーズ

読解フェーズで内容としては正しい答案が書けたとしても、それが読みにくかったり冗長であっては良い答案とは言えない。採点者に伝わらなければ意味が無いので、自分の都合を排除して他人に親切な答案を書こう。

ここで使えるテクニックは以下のようなものだ。

- ▶ 意味を保存しつつ主語を変える。
- ▶ 動詞を名詞化する。
- ▶ 漢語に言い換える。
- ▶ 重要度の低い語を削除する。

これらのテクニックを用いて文章を簡潔にするとともに、余裕があったら自分なりのこだわりを見せてより良い文章を目指そう。ただし、読解フェーズで整えた意味を崩さないようにだけ注意してほしい。

急がば回れ

これらの三つのフェーズを、焦らず辿っていけば必ず正解に近づくはずだ。逆に、焦ってフェーズを飛ばしてしまうと、間違った道を突き進んでしまうことになる。三つのフェーズが実際の問題でどのように展開されるかは、各年度の問題解説の中で確認してほしい。

虎の巻に基づいた採点法

本教材では、以上で紹介した虎の巻に合わせた採点法を用いる。実際の東大入試がどのような基準で採点されているかを我々は知る由もない。しかし、東大入試を

受けて、採点された結果を知ることができる。そこから推察されるのは、予備校の採点基準のように「〇〇という表現があれば△△点」という採点基準ではないのではないかということである。現代文という教科の本質は「与えられた文章（問題文）に基づいて、論理的な読解をし、適切な表現を与える」ことなのであるから、その本質を付いている受験生に高い得点を与えたいと思うだろう。

まず、点数は大きく三つの部分点から構成されるとする。

1. 構成点（0~2点）
2. 読解点（0~2点）
3. 表現点（-1~1点）

「構成点」は主に構成フェーズに対応する部分点である。つまり、回答が設問の要求する回答の形式に合致しているか、また設問の要求に過不足なく答えられているかを採点する。「読解点」は、主に読解フェーズに対応する部分点である。つまり、本文の内容を正しく読解できている（ことが答案から読み取れる）かを採点する。

構成点と読解点の採点例として、解答すべき要素がAとBの二つである設問を想定してみる。以下に様々な場合についての採点結果例を載せる。

合計点	Aについて	Bについて	構成点	読解点
4点	正しく解答	正しく解答	2点満点	2点満点
3点	正しく解答	言及されているが、誤読がある	2点満点	1点（Bについての誤読で1点減点）
2点	正しく解答	言及されていない	1点（Bについての無言及で1点減点）	1点（Bについて正しい読解が為されているか不明であるため1点減点）
1点	言及されているが、誤読がある	言及されていない	1点（Bについての無言及で1点減点）	0点（AとBどちらについても正しい読解が為されているか不明であるため2点減点）
0点	言及されていない	言及されていない	0点（AとBについての無言及で2点減点）	0点（AとBどちらについても正しい読解が為されているか不明であるため2点減点）

「表現点」は、表現フェーズに対応する部分点である。つまり、文章としての簡潔さや明瞭さについて採点する。表現点は、最大1点の減点と最大1点の加点の両方が行われ得る。文章として特筆するほど簡潔でも冗長でも無い場合、もしくは同様に特筆するほど明瞭でも不明瞭でも無い場合、表現点は0点である。

表現点の具体的な採点基準は以下の4点である。

以下の <u>全て</u> を満たしていれば加点		以下の <u>いずれか</u> を満たしていれば減点
字数	65字以内	75字以上
主語と述語	揃っている	欠けている
修飾関係	明瞭	不明瞭
言い換え	意味を保存した正しい言い換えができて いる	言い換えを試みたが、 適切な言い換えができていない箇所があ る

現代文を学ぶことの意義

現代を学ぶことは、第一義的には受験の得点を取るためであるが、それだけには留まらない。高校で現代文をしっかり学ぶことにはどんな意義があるのだろうか。

勉強と学問

高校までの「勉強」と大学に入ってから「学問」は大きく異なる。その違いがあまりに甚だしいため、高校までの「成績」がよかったとしても、大学での「学問」で成功するとは限らない。とはいえ、「勉強」は「学問」のために足腰を鍛えることであり、勉強抜きに学問ができるようになることはない。

大学受験を終えた後、君たちは高校とは比べようもない膨大なテキストに埋もれた空間に身を晒すようになる。そうなった時に現代文にしっかりと向き合ってきた人とそうでない人では天と地ほどの差がある。

大学ではテキストを忠実に読み取ることのその先を求められる。そのテキストをどう読み取り、そのテキストの不十分さを補いつつ、知の体系の中に自らに由来のある（original）一石を投じていくことが求められる。採点はされないの、自由に思考を羽ばたかせることも、あえて誤読を試みることも許される。しかし、その作業はあくまでも一旦テキストを忠実に読み取ることを経験していなければ、くだらないものにしかならない。

ピカソだって写実的な絵を描かせてもまた上手に描けたのだ。今の勉強がつまらないように感じていても、避けては通れない局面であり、その先に、その先にこそ、学ぶことの面白さも待っていることを期待して受験の現代文も点数のためではなく、将来の楽しみのために学ぶというスタンスで学んでみてほしい。

大学を卒業してから

問題文を読解して、適切な表現を与え、解答を仕上げるためには、もちろん「Know-how（ノウハウ・手続き的知識）」が必要である。しかし、そのノウハウがただ単にノウハウであれば、現代文を解くためには十分でないどころか、将来のためにもならない。

現代文をあくまで「受験」のためのものと捉え、「○○」という形式のものには「 」と答えればよいという公式（のようなもの）を暗記し機械的に適用することが「勉強」だと言い張る受験生も多いかもしれない。しかし、実際には、試験会場に暗記した形式の文章がそのまま出てくるかどうかは分からず、かつ、その受験会場で出逢う一期一会の問題で求められている解答が公式通りである保証はない。この意味で受験対策上に不備がある。また、受験上記でみたように大学での学問の基礎体力づくりにもならないので大学に入ってから苦勞する。しかも、それだけではなく、大学を卒業してからもそのような態度では苦勞することになる。

情報技術が発達し、国境を超えた人間のネットワークが形成されているグローバル化の時代において、私たちは、大学を卒業してから、大学院で学問の最先端と向き合ったり、企業や官庁に就職して世の中の課題を解決することになる。そのとき、私たちが高校や大学で学んでおり活かすことができるのは、単純な「ノウハウ」ではなくて、「Know-whyが含まれるKnow-how」である（Scardamalia&Bereiter, 2014）。これは厳密に言えば、「説明として一貫性のある実用的知識（explanatorily coherent practical knowledge）」とも言える（Bereiter, 2014）。「なぜそのノウハウがそのように適応できるのか」というWhyの部分を含めて、Howを知らなければ、複雑な現代社会で適切に問題を発見し、定義し、解決する上で非常に重要なことなのである。そのような「Know-whyが含まれるKnow-how」を学んで使いこなせるようになることで、新しいアイデアを創造し、社会をまた一歩進めることに貢献することができる。

そして、このことは、現代文にも当てはまる。「Know-whyが含まれるKnow-how」を会得することが現代文を向上させるための鍵である。「公式集」のようなものを暗記したところで、それは資質・能力を向上させることにならない。受験に役立つかも怪しく、大学に入ってから、大学を卒業してからも苦勞することになるだろう。だとすれば、受験生の今のうちから、原理原則を押さえつつ、理性を頼りに、対象と誠実に向き合って考え抜くという経験を積んでおくことは悪いことではないだろう。

【参考文献】

Bereiter, Carl. "Principled practical knowledge: Not a bridge but a ladder." Journal of the Learning Sciences 23.1 (2014): 4-17.

Scardamalia, M. and Bereiter, C. (2014) 'Knowledge Building and Knowledge Creation', in Sawyer, R.K. (ed.) The Cambridge Handbook of the Learning Sciences:. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 397–417.

著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。